

先史アジア語とその残影 (1)

近 藤 健 二*

はじめに

現生人類はアフリカに生まれ、世界に広まった。言語も、人々の移動とともに散り散りになった。

人類学の教えるところによれば、約 20 万年前のアフリカに誕生した現生人類は、5～6 万年前にアフリカを出立して世界各地に分散していった。西方へ向かった人々は 4 万年前にはネアンデルタール人の住むヨーロッパ大陸に進出していた。一方、東方へ向かった人々はインドを経て、東南アジアに達し、そこから南東へ向かった人々は約 5 万年前にオーストラリア大陸に到達したという。また、北に向かった人々は約 4 万年前には今の中国あたりにやって来ていた。日本列島には 4 万年ないしは 3 万 5 千年前に東南アジアから琉球列島経由で、また 2 万 5 千年前から 1 万 5 千年前にかけて朝鮮半島から九州に人が渡来したことを示す石器群が発見されているという。

さらに遠くへ移動した集団があった。いわゆるマンモスハンターである。彼らはマンモスやバイソンなどを追ってシベリアに歩を進めた。気候が極度に寒冷化した 2 万年ころから南下し、一部の者はシベリアと地続きであった日本列島にもやって来たが、その後 1 万 4 千年前から 1 万 1 千年前にかけて、現在の南北アメリカ原住民の先祖にあたる人々がアラスカに渡り、約 1 万年前に彼らの子孫は南アメリカの最先端にまで達したという。

人類のこの広大な大地への拡散は、当然の結果として言語に地域差をもたらした。人々の交流が可能な範囲がいわば一つの言語圏となっていたからである。しかし、いつの時代にいくつの言語圏があったのか、それは不明である。そもそも、言語圏と言語圏の境は曖昧であったにちがいない。

本稿とこれに続く稿において究明したいのは、このような言語圏の存在である。以下の論述では、先史時代のアジアに一大言語圏が存在し、それが 1 万年を超える時間の中で何百とも知れぬ小さなまとまりに分断されていたと仮定したうえで、関連する諸事実の断片をつなぎあわせてその裏付けを提示したい。

*人文学部教授一言語学

1. 諸説紛紛の日本語系統論

アジア言語圏を論じるのに日本語系統論は無関係であると思われるかもしれないが、関係はある。第一に、日本語はアジアの一部である日本列島において成立したものであり、いわば先史アジア語の後裔の一つであると見なされるからである。第二に、本稿の主張は従来の日本語系統論の多くがよって立っているのとは大きく異なる考え方にもとづくものであり、その点で私は従来の説のいずれにも異議を唱えたいからである。

以下、日本語系統論あるいは日本語形成論の主だったものを、北方語起源説、北方語と南方語の重層説、チベット・ビルマ語起源説、多言語重層説、タミル語起源説、アジア古層語起源説、縄文語・弥生語連続説の順に取りあげ、それらについて概説するとともに、それらの問題点を指摘する。

1.1. 北方語起源説

この説は、日本語が朝鮮語、ツングース諸語、モンゴル語、トルコ語などとともにアルタイ語族を構成するという古くからある説である。アルタイ言語学者の R. A. ミラー(1982)は、この説を強力に支持した一人であった。アルタイ語族は音声面において類似しているだけでなく、文法面においても、

- (1) 動詞が語幹と語尾からなる。
- (2) 動詞語尾の種類が多い。
- (3) テニヲハに相当する助詞、すなわち後置詞を用いる。
- (4) 「主語＋目的語＋述語動詞」という語順をとる。
- (5) 修飾語が被修飾語の前におかれる。

などの共通点を有する。しかし語彙面での一致が薄弱であるため、近年ではアルタイ語族そのものの存在が疑われるようになっている。なお別の稿で論じるように、日本語の動詞語尾はアルタイ系以外の言語と関連づけてその起源を説明することができるので、これをアルタイ系言語の特徴として強調しすぎるのは禁物である。

1.2. 北方語と南方語の重層説

この説には、北方語が先にあってそれに南方語がかぶさったとする説と、逆に南方語が先にあってそれに北方語がかぶさったとする説とがある。北方語とは上述のアルタイ系言語のことである。また、南方語とは南太平洋の島々に分布するオーストロネシア語族のことであるが、これは南島語とも呼ばれる。

北方語の上に南方語がかぶさったとするのは川本崇雄 (1978) である。川本は次のように述べている。

私はこう推定します。日本列島には縄文時代の末期、アルタイ語的な言語 A が行なわれていました。そこへ秀れた稲作文化を担った南島語族が言語 B をもたらしました。土着の人々は新来の高度の文化を吸収するために、外来の言語 B を競って学びました。外来の人も土着の人も二重言語生活を強いられました。自分達の部落へ帰れば純粋の B または A を用いますが、一たん外へ出ると、単語は B のものですが A のくせのまじった混同言語 B' という共通語を使用しなければなりません。月日が流れ時代が移るにつれ、外来の人々の家庭では、老人がいくら純粋の B を使用する努力をしても、子や孫は外の同年輩の多くの人の使用する共通語 B' を好むようになります。かくて百年二百年たつうちには、外来の人たちの家にも、B' しか知らない人達が育つようになるのです。外の世界では、古くさい言語 A または A' と、しゃれた文化語 B' が長い間併存を続けます。しかし大勢には抵抗できず、やがて A も A' も亡びてしまったのです。(145 頁)

一方、南方語の上に北方語がかぶさったとする代表格は村山七郎 (1979) である。村山は次のように言う。

……縄文時代には琉球から九州、西南日本にかけて南島系言語が行なわれていたと推定されます。……縄文晩期か弥生初期に朝鮮半島を経てアルタイ・ツングース的な言語が九州に渡来し、そこできわめて多量の南島語要素を吸収し、しだいに「日本祖語」(原始日本語) が誕生したのでありましょう。(295-96 頁)

これらの説はいずれも、現在の人類学のおよび考古学的知見からすれば、事実と反していると言わざるをえない。まず第一、縄文晩期から弥生初期に朝鮮半島を経てアルタイ・ツングース的な言語が九州に渡来したというのは事実無根である。実際、縄文時代が始まった約 1 万 3 千年前から現在に至るまでの間に北方系民族が渡来したという証拠はない。彼らがやって来たのは縄文時代が始まる前のことである、というのが専門家の一致した見解である。

川本の説にも問題がある。縄文人を形成したのは北方の出身者だけではない。また、稲作文化は南太平洋の島からではなく、中国大陸の長江下流域からもたらされたものである。これも今や定説となっている。

1.3. チベット・ビルマ語起源説

日本語とチベット・ビルマ語が同系だとする論は C. K. パーカー (1941) から西田龍雄 (1978) へとつながっている。西田は、「日本語の中核を占める部分はチベット・ビルマ語系の言語と同じ祖形から来現している」と見ている。

確かに、チベット・ビルマ語系言語は日本語とよく似ている。しかし、チベット・ビルマ

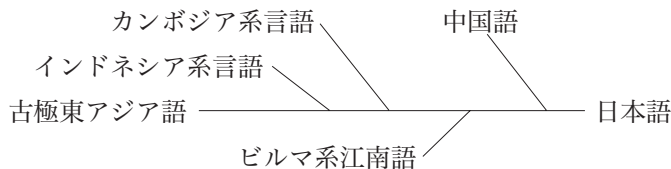
語系民族がその言語を日本列島に持ち込んだ可能性はほとんどない。稲作の起源と稲作渡来民の研究者である池橋宏（2008）は、そのことについて次のように述べている。

私はイネの問題を多方面から検討して、それは中国の長江流域で、タイー漢語系の言語を話す人々によって栽培化されたという結論を得た。そして、これまで漠然と、しかし根強く存在していた、南島語を持ち込んだ稲作渡来民とか、ポリネシア系の航海民と稲作の関係という考え方に対して、ある程度決着をつけることができた。上記の藤堂明保の見方によれば、中国大陆の東側を南下したタイー漢語系の人々が水田稲作を基礎とする文化の創始者であるのに対し、チベットービルマ語系の言語を話す人々は遊牧民であった。彼らは中国の領域の西側を南下して、雲南からインドシナ半島の高地にかけて広く分布している。……ビルマ語と日本語の対応があるとすれば、それ自体は検討すべき課題であるが、稲作の伝来という枠組みからは検討できない。（220-21 頁）

ここに述べられているようにチベット・ビルマ語系の民族がイネを持ち込んだのではないとすると、チベット・ビルマ語系の言語と日本語の類似性は稲作の伝来によるものではない、ということになる。このことは日本語の起源を考えるうえできわめて重要である。

1.4. 多言語重層説

安本美典（1978）は語彙統計学の手法を用いて、「日本語の形成論」なる独自の考えを提唱した。そして、自説を次の図のようにまとめている。



私に言わせれば、これは架空の想定である。まず第一に、安本が日本語、朝鮮語、アイヌ語の母胎となったと見なす古極東アジア語の正体が不明である。どこからそれがやって来たか考えるのか。次に、約6千年前から約7千年前にかけてインドネシアおよびカンボジア方面から人の流れがあったという考えは、今日の人類学的・考古学的知見から乖離している。また、稲作文化とともにビルマ系江南語が流入したという想定も、上述したとおり事実在即しているとはいいがたい。上の図で唯一支持できそうに思われるのは、西暦紀元前後から2千年にわたって押し寄せたとする中国語文化の波だけである。

結局のところ、安本の唱える日本語形成論は、語彙統計というものが日本語の形成過程を解明するための手段として有効ではないことを図らずも明らかにした、と言っても過言ではない。

1.5. タミル語起源説

有名なタミル語起源説の本当の内容は案外と知られていない。それは、ひとことで言うと、弥生時代の日本でタミル語のクレオール化が起こったというものである。つまり、縄文時代の日本語は南方からもたらされた、オーストロネシア語族と同系の言語であったが、紀元前5百年ころに南インドからタミル人が渡来し、タミル語がそれまであった言語を駆逐したという説である。そのことを説いた大野晋（2000）の次の文章は十分にかみしめて読まなければならない。

単語だけに見られる対応ならば朝鮮語との間に例がある。日本語と漢語との間には莫大な対応語がある。しかし漢語は借入れである。日本語と中国語との間には文法上、語形変化の仕方（用言の活用など）や、語順に極端な相違がある。助詞・助動詞にも対応する例は全くない。従ってこの両言語の間には同系の関係は全然ない。しかし、日本語とタミル語との間には、次の類似がある。

①約500語におよぶ単語の対応例がある。

②文法形式が類型学的にほぼ同一である。

③文法的 morpheme（形態素）（日本語の助詞・助動詞とタミル語の小辞・動詞接辞）の中の使用度数の極めて多いものの中に音韻・用法にわたって対応する例が20語以上ある。

これによれば、日本語とタミル語との関係は「同系である」という条件を備えている。しかし、対応する単語の中には、日本では弥生時代（B. C. 500-A. D. 300）になってはじめて見られる文明の単語、つまり水田稲作・金属使用・機織に関係する単語30語以上が見出される。この対応は、縄文時代には生じ得なかった。何故ならば、これらの文明的事実は、縄文時代には存在しなかったことが考古学によって明らかにされている。だから、その単語が縄文時代に日本にあったはずはない。

つまり、タミル語と日本語との関係は中途から、弥生時代に生じたものである。すなわちタミル語と日本語とは、何か一つの祖語があつて、それが数千年前東西に分岐して、それぞれの言語となったというものではない。異なる文明が接触した場合、それと平行して優越する文明を荷なう側の言語が相手の種族または民族によって受け入れられ、そこに優越する文明が広まって行くにつれて、その文明の言語もその地域に広まって行くという現象が日本において生じたのではないか。（698-99頁）

私はかつて拙著（2005：463-67）において、大野のタミル語起源説には受け入れられる部分と受け入れられない部分があると述べた。この考えは今も変わっていない。

日本語とタミル語の間に上記①～③の類似性が認められるから両言語は同系であるという考えは受け入れられる。大野の主張はまことに不人気ではあるが、大野がその著書の数百ページを費やして検証しようとしたことを完全否定するのは非科学的な態度であると思う。

一方、受け入れられないのはタミル人が日本列島に渡来し、タミル語が南方系の縄文日本語にとって代わったという考えである。タミル人が稲作をもたらした民であり、タミル人が弥生文明の担い手であったという考えに与する、この筋での専門家は一人もいない。証拠がまったくないからである。

このようにタミル語起源説をまるごと支持することはできないけれども、この説の根幹を支える言語事実、すなわち日本語とタミル語が似ているという事実は、日本語がチベット・ビルマ語系の言語と似ていることと同じくらいに重要である。

1.6. アジア古層語起源説

この説を提唱したのは中本正智（1992）である。中本は、日本語が東シナ海沿岸域に成立したアジア古層語に根ざしたものであったとして次のように論じている。

日本語が北方から来たとか、南方から来たというのであれば、それが日本列島に及ぶためにはその源に強文化圏としての背景がなければならないのであるが、はたしてそれがあったのかどうか、あったとすれば、それはどこであったのか、検討することからはじめなければならない。

もし、北方系、南方系とよべなくなるとすれば、最近、試みられているように、日本語を混合語とよぶことも適当ではない、ということになる。

周辺のいくつかの言語に類似している点をとらえて混合語とするなら、この地球上の多くの言語が混合語ということになりはしないか。それにしても朝鮮語や中国語を混合語というのを聞いたことがない。

では、日本語はどのようにしてできた言語であったのだろうか。それは東シナ海沿岸域に広がったアジアの古層語の一団から発達してきた言語であるということである。

これは、多くの語の分布と、その比較研究を通して、しだいに明らかになっていくであろう。

言語の系統の解明に言語地理学的方法を加えることは必要であり、そうすることによって日本語の系統の研究に新しい展開をもたらすことを期待するものである。（23-24頁）

また中本は、日本語の形成地が東シナ海沿岸であったと想定することについて次のように述べている。

結局、アジアにおける言語分布の状況は、過去にさまざまな地域で、いくつもできた大小の強文化圏が、どこまでどう及んでいったかという結果であり、その及びかたのちがによって、それぞれの言語が独自に発達し、強文化圏同士の言語の溝を深めていったということなのである。東シナ海沿岸地域は、島嶼部といい、大陸沿岸側といい、四方からの強文化圏がぶつかり合った地域であり、日本語が北方系にも南方系にもつなが

る要素を含んでいる原因は、まさにそこらあたりにあるのであって、これまでの系統論者が説いてきたようにどこかの土地で日本語の性格を完成させてから、この列島へやってきたのでないことが了解されたと思う。(334 頁)

中本の説は魅力的ではあるが、思弁的すぎて、具体的な証拠を欠いている。そもそも、アジア古層語なるものが存在した時期がわからない。それは日本列島に人が確実に渡来したと言われる 4 万年から 3 万 5 千年くらい前のことなのか、あるいは縄文時代が始まった 1 万 3 千年くらい前のことなのか、あるいは弥生時代が始まった 2 千数百年前のことなのか。このことについて中本は無言である。

ところで、中本の説を根底で支えているのは言語地理学的方法である。言語地理学というのは、単語の分布図を描いて、そこから言葉の歴史を読みとろうとするものであるのだが、中本はそのような手法を用いて日本語の系統を探ろうとしているのである。ひどい言い方をすると、音韻対応をないがしろにしたぺらぺらな言語地図からぶあつい過去の歴史を知るのは至難のわざであろうと思われるけれども、中本は、同源とおぼしき語が言語の境界線を越えて広がっていることに注目して、アジアの諸言語がかつて曖昧な仕切りを有する連続体であったという本質を直観的に見抜いている。中本は、まさにこの点においてこそ讃えられるべきである。

1.7. 縄文語・弥生語連続説

この説は、縄文時代の日本語と弥生時代の日本語との間に断絶があるとする大方の日本語系統論に一石を投ずるか、一矢報いようとした小泉保 (1997) の論である。小泉は、従来の系統論では縄文時代の言語がほとんど欠落しているとしたうえで、次のように述べている。

縄文語への探索をはばむものは何か。それは弥生語が縄文語に入れ替わったという、いわれのない「弥生語交替説」である。この場合の弥生語は奈良時代の先代に当たる言語を意味すると考えてよい。弥生語こそが原日本語であり、弥生語が縄文語を制圧したという憶説は、いまなお日本語の歴史を考究する際の大きな障害になっている。この憶説の欠陥は、弥生語自体の成立が明確にされていないことと、縄文語と交替したという想定が思い込みの域を出ていないということにある。

考古学や人類学が縄文時代と弥生時代は連続していると主張しているのに、系統論者は確証もないのに、両者は断絶していると決めてかかっている。二千年前に弥生語が縄文語を一掃するという日本語の運命を劇的に変転させるような大事件が起こったのであろうか。果たして縄文語はまったく消滅してしまったのであろうか。日本のどこかに縄文語は残存しているのではないか。改めてこうした疑問を投げ掛けてみる必要があると思う。(132-33 頁)

これは言い過ぎである。小泉は「断絶」という言葉を極端に解釈している。「縄文語と弥

生語の間に断絶がある」というのは、「縄文語が絶滅し、残存していない」ということを意味するものではない。このことは、「連続」という言葉の解釈にもあてはまる。「考古学や人類学が縄文時代と弥生時代は連続していると主張しているのに、系統論者は……」と小泉は言うけれども、この場合の「連続している」というのは「違いがない」ということを意味するものではあるまい。

要するに、歯車がかみあっていないのである。よくよく考えてみると、小泉が想定している日本語形成過程と従来の系統論者の多くが想定しているものとの間には、小泉が感じているほどの差はないことがわかる。それは小泉の次の発言からも見てとれる。

日本列島が大陸と地続きの時代には、大陸から固有の言語をもった種族がこの島へ渡ってきたであろう。しかし、この国土には一五万年以上前から人類が住んでいたという考古学的確証がある。とにかく、島国となった日本に縄文文化が醸成されてきた。これと歩調を合わせる形で、異質の複数言語が競合しながら次第に統一され原日本語が定立されたと推測するしかないだろう。(155頁)

ここに不確かなことが述べられていることを指摘しておかねばならない。「この国土には一五万年以上前から人類が住んでいたという考古学的確証がある」というのは、おそらく旧石器の捏造によって生まれた言説である。この1文を除外すれば、小泉の想定は常識の範囲内におさまる。

ところで小泉は、縄文語の音韻的特徴を考察するとともに、『日本言語地図』（国立国語研究所、1968）にもとづいて縄文語と弥生語の区別がつく語を探そうとしている。そして、「頬・面（ツラ、地域によってはチラ）」という語は形質的に縄文人の直流と考えられる人たちの居住する地域で使われているから縄文語であると見なしている。一方、「顔（カオ、古くはカホ）」という語は日本の中央部、すなわち近畿、中国、四国で用いられているから弥生語であると見なしたうえで、「顔」は

「かぼ」[kapo] > 「かほ」[kafo] > 「かを」[kawo] > 「かお」[kao]
という音声変化を受けたとしている。

「頬・面」と「顔」についての小泉の考察は中途半端である。「顔」が弥生語であるとして、それはどこからやって来たのか。中国語の顔(yán)「ひたい・かお」を借用したものなのか。この語の古代音はŋǎnであったとされているが、この音がkapoとなることはあるまい。とすれば、「顔」はkāpという古代音を有したとされる中国語の頬(tcíá)「ほお」を借用したものなのか。しかし、kāpという音は古代日本語の「皮(kaɸa)」につながり、さらにアイヌ語のkap「皮」にも通じているように思われる。したがって、「顔」は弥生語であるとすぐには決めつけられない。ちなみに、この語は縄文系日本人の割合が非常に高いとされる岐阜県飛騨地方でも流通している。少なくとも本稿の分析では、「顔」は縄文語である。

縄文語と弥生語の連続性にかかわる問題は、小泉が考えるよりもはるかに広範で、奥が深い。そして、やっかいな問題でもある。

2. 古代中国語から見た日本語の先史

従来の日本語系統論に欠落していたものの一つは、中国語と日本語との比較である。中国語は日本語とは系統の異なるものであるから日本語系統論の考察対象とはなりえない、と思われるかもしれない。実際そのように思われて、中国語ははなから問題とされてこなかった。そして中国語は、おびたしい数の漢語の出所としての地位しか与えられてこなかった。この点は、これまで日本語の本来語と見なされてきたいわゆる大和言葉の中の多数の語が中国語と重なることを指摘した小林昭美 (2007) においても同じである。しかし私には、小林が中国語起源の語としてすくい取っている大和言葉のすべてが、また小林の網の目からもれ落ちている多数の大和言葉が中国語からの借用語であると割り切る自信はない。そして、これらの語の多くが縄文時代以来の本来語であつたのではないかという思いを絶ち切ることができない。いずれにせよ、中国語は日本語と同系の言語ではないという常識の壁を突破しなければ、かつてのアジアに一大言語圏が存在したという想定に説得力は生まれない。

2.1. 中国語起源の弥生日本語

二つの言語が同系の言語であると言うには、少なくとも両言語の間にいわゆる音韻対応が認められねばならない。音韻対応とは、たとえば

ラテン語	英語
pater 「父」	father 「父」
pēs 「足」	foot 「足」

におけるラテン語の p 音と英語の f 音のような、音の規則的な対応関係のことである。

インド・ヨーロッパ諸語では、このような音韻対応が非常に明瞭である。したがって、ある言語のある語が別の言語のある語と同源であるかどうか容易に判断できる。また、たとえば

ラテン語	英語
pācem 「平和」	peace 「平和」
passus 「歩調」	pace 「歩調」

におけるような、ラテン語の p 音と英語の p 音との対応関係が語の借用によるものであると容易に判断されるのである。

中国語と日本語の場合には、これほど簡単にはいかない。なるほど音と訓の区別があつて、音は中国語から借用されたものであり、訓は基本的に大和言葉であると了解されてきた。過去、これに異論を唱える向きもあつたようだが、素人考えとして無視されてきた。しかし現在、大和言葉が固有の日本語であるという理解は大きくゆらいでいる。

今ここでしようとするのは、小林昭美 (2007) が弥生時代の借用語と見なしている言葉の検証である。そのためにも、小林があげている例の中から適切なものを中心にいくつかを抜き出し、それをわかりやすく加工したうえで、対応関係を次のような形にして示す。

性 (sieŋ > cìn, ㄣシャウ, ㄣセイ)「さが」 ↔ 性 (saga)

ここに示されている sieŋ は中国語の上古音、すなわち日本の弥生時代と重なる周・秦の時代の発音である。一方、cìn は現代北京語音である。いずれも藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和辞典』(学習研究社, 2005) に準拠している。そして、漢字音を表す呉音と漢音が旧仮名遣いで示されている。また、対応する日本語の例は奈良時代の形態で示されている。

さて、最初に検討の対象とするのは語末音である。この点に関して小林が述べていることを以下の (1)~(4) に整理して、それぞれの例を示す。そのうえで、問題点の指摘を行う。

(1) -n, -m とナ行音, マ行音との対応

金 (kɪəm > tɕīn, ㄣコム, ㄣキム)「かね」 ↔ 金 (kane)

絹 (kiuan > tɕuàn, ㄣㄣケン)「きぬ」 ↔ 絹 (kinu)

肝 (kan > kân, ㄣㄣカン)「きも」 ↔ 肝 (kimo)

君 (kiuən > tɕūn, ㄣㄣクン)「きみ」 ↔ 君 (kimi)

闇 (əm > ān, ㄣオム, ㄣアム)「やみ」 ↔ 闇 (yami)

占 (tiam < tɕàn, ㄣㄣセム)「しめる」 ↔ 占む (simu)

ここにあげられている日本語のうち「金 (kane)」と「絹 (kinu)」は、中国からもたらされたものの名であるから、借用語であると断定できる。他の語も借用語である可能性が高い。

ところで、ここにあげられている語の多くは「覆う」とか「含む」という意味、あるいは「覆われたもの」とか「含まれたもの」という意味が内包されている。たとえば、「金」は鉱石に含まれたもの、「絹」は「衣 (kinu)」と同様に身体を覆うもの、「肝」は身体に覆われたもの、「君」は臣下を召し抱える人、「闇」は大地を覆うものである。このように共通の原義とも言いうるものを有するという意味において、これらの語は広い意味での単語家族を構成していると言えなくもない。そして重要なことは、これらと同類の語がほかにも多く存在するということである。たとえば、中国語には含 (fiəm > xán)「ふくむ」、管 (kuan > kuǎn)「くだ」、館 (kuan > kuǎn)「やかた」などがあり、日本語には「籠む (kōmu)」、「組む (kumu)」、「釜 (kama)」、「髪 (kami)」などがある。餌食を包みこむ蜘蛛の巣のイメージに根ざした「蜘蛛 (kumo)」や、糊殻に包まれたもののイメージに根ざした「米 (kōmē)」も同じ仲間である。さらに、地上を覆うもののイメージに根ざした「雲 (kumo)」や「心をとられる」を意味する「感く (kamaku)」もそれらの同類と見なされるが、これらの語には中国語の雲 (fiuən > yún)「くも」および感 (kəm > kʰǎn)「感じる」との間に音韻対応が認められる。したがって、これらは中国語からの借用語かもしれない。その可能性は高いとも言える。しかし、これらが借用されたものであったにせよ、そのような借用を簡単に許す土壌が日本語にあったということは理解されるであろう。

なお、小林は日本語の「困る (komaru)」を中国語の困 ($k^h u \text{an} > k^h \text{un}$) 「こまる」の借用語と見ているが、「困る」は奈良時代よりもあとで生まれた語であるので借用語ではない。この事実は、中国語との間に音韻対応が認められる日本語は借用語であるとすぐには判断できないことを物語っている。

(2) η とカ・ガ行音, マ行音との対応

泳 ($fiu \text{a} \eta > y \text{ö} \eta$, ㄩㄥヤウ, ㄩㄥエイ) 「およぐ」 $\longleftrightarrow$ 泳ぐ (oyogu)

羊 ($g \text{ia} \eta > y \text{a} \eta$, ㄩㄥヤウ) 「ひつじ」 $\longleftrightarrow$ 山羊 (yagi)

塚 ($t \text{u} \eta > t \text{s} \text{ö} \eta$, ㄣㄣチュウ, ㄣㄣチョウ) 「つか」 $\longleftrightarrow$ 塚 (tuka)

湧 ($d \text{iu} \eta > y \text{ö} \eta$, ㄣㄣユウ, ㄣㄣユウ) 「わく」 $\longleftrightarrow$ 湧く (waku)

桶 ($t^h \text{u} \eta > t^h \text{ö} \eta$, ㄣㄣツウ, ㄣㄣトウ) 「おけ」 $\longleftrightarrow$ 麻笥 (wokë)

公 ($k \text{u} \eta > k \text{ö} \eta$, ㄣㄣク, ㄣㄣコウ) 「おおやけ」 $\longleftrightarrow$ 公 (kimi)

霜 ($s \text{ia} \eta > \text{su} \text{a} \eta$, ㄣㄣシャウ, ㄣㄣサウ) 「しも」 $\longleftrightarrow$ 霜 (simö か simo)

中国語の η は弥生語ではカ・ガ行音で、また時にマ行音で現れる、と小林は述べている。この主張を支える例は、小林があげている例のほかにも多く見つかる。たとえば中国語の梃 ($d \text{e} \eta > t^h \text{ö} \eta$) 「てこ」、丈 ($d \text{ia} \eta > t \text{s} \text{a} \eta$) 「たけ」、沖 ($t^h \text{io} \eta > t \text{s}^h \text{ö} \eta$) 「おき」などにおいても、これらに対応する日本語との間に「 η 対カ行音」という関係が観察される。しかし、 η はカ・ガ行音あるいはマ行音とだけ対応しているわけではない。めずらしい例ではあるが、次のような対応関係も観察される。

常 ($d \text{hia} \eta > t \text{s}^h \text{a} \eta$, ㄣㄣジャウ, ㄣㄣシャウ) 「つね」 $\begin{matrix} \nearrow \text{常 (toko)} \\ \searrow \text{常 (tune)} \end{matrix}$

ここでは η が一方においてカ行音に、他方においてナ行音に対応している。小林の議論では、日本語のナ行音が中国語のどういう音と対応しているかに関する考察が万全ではない。また、

杖 ($d \text{ia} \eta > t \text{s} \text{a} \eta$, ㄣㄣチャウ, ㄣㄣヂャウ) 「つえ」 $\longleftrightarrow$ 杖 (tuφe)

では η がハ行音と対応しているが、小林はこれもまた見落としている。広範な語において観察されるハ行音との対応は、あとで述べるようにきわめて重要な意味をもっている。

ところで、上にあげた「山羊 (yagi)」という語は中国語の羊 ($g \text{ia} \eta > y \text{a} \eta$) 「ひつじ」と同源ではあろうが、弥生時代に借用された語ではないように思われる。というのも、「山羊」という語は古語辞典に記載されていないからである。つまり、それが奈良時代あるいは平安時代に使われていた形跡がないからである。ただの思いつきで言えば、この語は朝鮮半島経由の語であろう。つまり「山羊」は、朝鮮語の yang 「ヤギ」を借用したものである可能性が高いように思われる。

ついでに、単純な過ちを指摘しておく。 η を有する中国語として奥 ($o \text{g} > \text{a} \text{o}$) 「おく」、咲 ($s \text{io} \text{g} > \text{c} \text{ia} \text{o}$) 「わらう」、咬 ($k \text{ö} \text{g} > \text{t} \text{c} \text{ia} \text{o}$) 「かむ」があがっているけれども、これらは -g を有する語として扱われるべきである。そして、 -g も日本語との間で η と同じ音韻対応を観察できるかどうかを検討されるべきである。

(3) -p, -t, -k とハ・バ・マ行音, タ・ダ行音, カ・ガ行音との対応

蝶 (dāp > tié, 呉デフ, 漢テフ) 「ちょう」 ↔ 蝶 (teφu)

渋 (sīap > sǎ, 呉ソフ, 漢シフ) 「しぶい」 ↔ 渋し (sibusi)

汲 (kiap > tci, 呉コフ, 漢キフ) 「くむ」 ↔ 汲む (kumu)

舌 (diat > sǎ, 呉ゼ(ツ・ゼチ, 漢セツ) 「した」 ↔ 舌 (sita)

筆 (piet > pi, 呉ヒチ, 漢ヒツ) 「ふで」 ↔ 筆 (φude)

竹 (tiok > tšú, 呉漢チク) 「たけ」 ↔ 竹 (takë)

削 (siok > ciāo/cuē, 呉サク, 漢シャク) 「けずる」 ↔ 削ぐ (sogu)

ここでは、小林があげている二つの例が不適格であることを指摘するにとどめる。一つは、「剥ぐ (φagu)」についてである。小林はこれを剥 (plūk > pāo/pō) 「はぐ」の借用語としているが、plūk と φagu は形が違いすぎている。なるほど、plūk は隋・唐の時代に pōk となったとされているが、これは弥生時代よりもはるかに後代のことである。もう一つは、「突く」についてである。この語が中国語の突 (duat > t^hū) 「つく」の借用語とされているが、duat と tuku も形が違いすぎている。したがって一方を他方の借用と見るのは無理である。

(4) -t とラ行音, -n とラ行音またはタ行音との対応

奪 (duat > tuó, 呉ダツ・ダチ, 漢タツ) 「うばう」 ↔ 取る (toru)

徹 (thiat > tš^hǎ, 呉テチ, 漢テツ) 「とおる」 ↔ 通る (toφoru)

巾 (kiǎn > tciñ, 呉コン, 漢キン) 「きれ」 ↔ 切れ (kire)

玄 (fiuān > cuán, 呉クエン, 漢グエン) 「くらい・くろい」 ↔ 黒 (kuro)

管 (kuan > kuǎn, 呉漢クワン) 「くだ」 ↔ 管 (kuda)

断 (duan > tuàn, 呉ダン, 漢タン) 「たつ」 ↔ 断つ (tatu)

これらの例に見られる音の対応を小林は音の転移によるものと述べているが、その主張にはまったく根拠がない。つまり、私に言わせれば、上にあげた中国語と日本語は同源でもなんでもない。

「取る (toru)」は「手 (ta/te)」に動詞語の「る (ru)」が付いた形である。そしてこの動詞語尾の起源は、-t や -n とは異なるところに求められなければならない。この問題は稿を改めて考察する。

「通る (toφoru)」は中国語の通 (t^huŋ > t^hōŋ) と同源である。すなわち、前者の -φo と後者の -ŋ の間に音韻対応を認めなければならない。このことについては本稿において後述する。

「切れ (kire)」に関しても、その -re が -n の転移したものであるなどとは考えられない。「切れ」は「切る」という動詞の派生形以外の何物でもない。

一方、中国語の巾 (kiǎn > tciñ) 「きれ」は含 (fiām > xán) 「ふくむ」や冠 (kuan/kuān) 「かんむり」と同源である。また、日本語の「衣 (kinu)」とも同源であり、その原義は身体を覆うものとしての「布ぎれ」ないしは「皮ぎれ」であったと考えられる。そしてこの「覆う」

という意味は、玄 (fiuān>cuán)「くらい・くろい」と管 (kuan>kuǎn)「くだ」という語にも内包されている。すなわち、「くらい・くろい」というのは覆われた内部の光のない状態のことであり、「くだ」というのは空洞の内部を覆っているもののことである。

日本語の「黒 (kuro)」と「管 (kuda)」も、「覆う」という原初的意味を内包している。しかし、これらの語源は上述の中国語とは異なっている。「黒」は「包む (kurumu)」,「殻 (kara)」,「畔 (kuro)」,「蔵 (kura)」,あるいは「懷 (putokoro)」の -koro や「衣 (koromo)」の koro- と同源である。またそれは、中国語の懷 (fiuār>cuái)「いやく・ふところ」や圉 (fiuər>wéi)「かこむ」と同源である。一方、「管」は日本語の「口 (kutu・kuti)」,「靴 (kutu)」,「竈 (kudo)」,「門 (kado)」などと、また中国語の窟 (kʰuət>kʰū)「あな」や穴 ((fiuət>cué)「あな」や櫃 (giuəd>kui)「ひつ」などと同源である。これらの語形はいずれも、音の転移によって生じたものではない。

「断つ (tatu)」についても同じことが言える。この語に対応する中国語は、断 (duan/tuàn)「たつ」ではなくて絶 (dziat>tcué)「たつ」である。-n が -t に転移したと考える必要はまったくないのである。

ところで、小林があげている例の中に同源と見なされる中国語と日本語の例が一つ含まれている。それを下に示してみよう。

嫌 (filam/cián, ㄟゲム, ㄟケム)「きらう」↔嫌ふ (kiraφu)

この例は、「嫌ふ (kiraφu)」の -ra- が -n の転移であるとする小林の考えがまちがっていることを如実に物語っている。この例に関して言うと、小林は上古音 filam によらずに、現代仮名遣いによる漢音「ケン」にもとづいて論を立てているのである。

以上 (1)～(4) が小林が述べていることのあらましと、それに対する問題点の指摘である。以下では語頭音について小林が論じていることの概要を (5)～(9) に分けて紹介するが、ここには当を得た指摘と見当外れの指摘とが入りまじっている。まさに玉石混交である。

(5) 日本語での語頭音の脱落

息 (siək>cī, ㄟソク, ㄟショク)「いき」↔息 (iki)

置 (tiæg>tɕi, ㄟㄟチ)「おく」↔置く (oku)

熱 (niat>rɿ, ㄟネツ・ネチ, ㄟゼツ)「あつい」↔熱し (atusi)

顎 (ɲak>ɿ, ㄟㄟガク)「あご」↔顎 (ago)

これらは同源であると言ってよい例である。しかし、たとえば「柳 (yanagi)」という日本語が中国語の柳 (liog>liǔ)「やなぎ」を借用したものであるというのはでたらめである。「柳 (yanagi)」は、小林自身が別の箇所ですべてのように、楊 (qian>yán)「やなぎ」と比較されなければならない。陸 (liok>lù)「おか」が「陸 (woka)」になったという指摘にも納得できない。「陸 (woka)」は埠 (puæg>pù)「はとば・おか」や浦 (pʰag>pʰú)「水辺・浜」と比較されるべきである。さらに小林は、折 (tiat>tɕɿ)「おる」が「折る (oru)」になり、織 (tiək>tɕi)「おる」が「織る (oru)」になったなどと多くの例をあげているが、このよ

うな変化が起こったことを裏付けるには語頭音が脱落したと言うだけでは足りない。音韻対応に対するもったきびしい配慮が必要である。

(6) k・k^h・g・ŋ・f・ç- とカ行音との対応

峡 (fiǎp>ciá, ㄍㄟㄝ, ㄎㄞ) 「はざま」 ↔ 峽 (kaɸi)

葛 (kat>kɿ, ㄎㄜ, ㄎㄜ) 「くず」 ↔ 葛 (kuzu)

画 (fiuěŋ>xuà, ㄍㄨㄚˋ, ㄍㄨㄚˋ) 「えがく」 ↔ 書く (kaku)

k- や k^h- などの語頭音がカ行音に対応するという小林の指摘には何の異論もない。しかし、語末部分の音韻対応に関して小林の理論が誤っているため、小林があげている例には不適切なものが多く含まれている。その最たるものは、言 (ŋǎn>yàn) 「いう・ことば」が「言 (kötö)」として借用され、雁 (ŋǎn>yàn) 「かり」が「雁 (kari)」として借用されたという例である。このように同じ発音を有する語がまるで異なる語形に変わったという考え、つまり同じ -n が一方において -tö となり、他方において -ri になったとするのは牽強附会である、と言わざるをえない。

(7) t・ts- などとタ行音, n- とタ行音, s- などとカ行音との対応

作 (tsak・tsag>tsuò, ㄗㄞ, ㄗㄞ) 「つくる」 ↔ 作る (tukuru)

殿 (duen>tiàn, ㄉㄣ, ㄉㄣ) 「との」 ↔ 殿 (tönö)

床 (dzian>tɕ^huán, ㄉㄜㄢ, ㄉㄜㄢ) 「とこ」 ↔ 床 (tökö)

中国語の t- や ts- あるいは d- や dz- などの音が日本語のタ行音に対応するというのはきわめて自然である。したがって、上にあげた中国語と日本語の組み合わせは同源の語であると判断してよい。しかし、中国語の s- などが日本語のカ行音に対応したり、中国語の n- が日本語のタ行音に対応するというのは尋常ではなく、小林が同源の語としている次の例も尋常ではない。

神 (dien>ɕ^hn, ㄉㄣ, ㄉㄣ) 「かみ」 ↔ 神 (kamī)

鳥 (tög>tiào・niào, ㄉㄜ, ㄉㄜ) 「とり」 ↔ 鳥 (töri)

小林の論は混乱している。小林の言うように、中国語上古音の k- は部分的に s-, あるいはそれに近い音となった。わかりやすい例を使って言うと、ラテン語の「カエサル」という人名が英語で「シーザー」となったようにである。そこで、たとえば「支」という同じ声符を有する語が

技 (gieg>tɕ^h, ㄍㄟ, ㄍㄟ) 「わざ」

枝 (kieg>tɕ^h, ㄍㄟ, ㄍㄟ) 「えだ」

のように、一方において「ギ・キ」、他方において「シ」という漢字音を有するに至った。ここまではよい。問題は、小林がおそらくうっかりして事実を見誤ったことである。つまり上の神 (dien>ɕ^hn) について言うと、小林はこの語の「シン」という漢字音に注目し、それが「カン」のような形に溯ると見なしたうえで、これが日本語の「神 (kamī)」として借用されたと考えた。しかし上に示したとおり、「シン」は dien に溯る。なお付言しておく、

「神 (kamī)」はアイヌ語の kamuy 「神」と同源である。

鳥 (tög>tiàu・niǎo) が「鳥 (töri)」になったというのもおそらく勘違いであろう。小林は中国語の n- が日本語で t- になった例としてこれをあげているけれども、中国語の鳥 (niǎo) というのはそもそも「代用語」である。つまり、中国語の鳥 (tög>tiàu) という語は鳥の尾が垂れ下がっていることに着目した命名であったのだが、この語の発音が、吊 (tög>tiào) 「つる・つるす」と同源の屖 (tiǎo) 「男性器」を連想させるため、これを嫌って鳥 (niào) という語が作られたのである。ちなみに、日本語の「鳥 (töri)」というのはおそらく日本語の「垂る (taru)」や中国語の垂 (dhiuar>tʂʰ uí) 「たれる」と同源で、これもやはり鳥の尾が垂れていることに着目した名であると考えられる。

中国語の s- などが日本語で k- になったという事実もなければ、中国語の n- が日本語で t- になったという事実もない。これが、小林のあげている例を検証して得られる結論である。

(8) n-・ŋ-・d-・tʰ-・m-・b- とナ行音との対応

汝 (niag>rǔ, 呉ニョ, 漢ジョ) 「なんじ」 ↔ 汝 (na)

魚 (ŋag>yú, 呉ゴ, 漢ギョ) 「うお・さかな」 ↔ 肴 (na)

額 (ŋak>ŷ, 呉ギャク, 漢ガク) 「ひたい」 ↔ 額 (nuka)

小林があげている多くの例の中で、適切な例は上の3例のみである。ほかは例として不適格である。たとえば、「長し (nagasi)」を小林は長 (dian>tʂʰ án) 「ながい」と同源としているが、n- と d- の間には音韻対応を認めがたい。「長し」は、永 (fiuan>yǒŋ) と同源と見るべきであろう。fi- は k- または g- が弱化した音であり、n- との距離も遠くない。

小林はまた「願ふ (negaφu)」を望 (mian>wán) 「のぞむ」と同源としているが、それは願 (ŋuǎŋ>yuàn) 「ねがう」と同源であろう。同様に、「縫ふ (nuφu)」は縫 (biuŋ>fǝŋ) 「ぬう」とではなく、紐 (niog>niǔ) 「ひも・むすぶ」と同源であると見なければならぬ。また、「鳴く (naku)」は鳴 (mieŋ>mín) 「なく」と同源ではない。次節で論じるように、この語は「さ鳴り (sanari)」のような「さ」の付く形態と関連づけなければ、その成り立ちを解明できない語である。

要するに、日本語のナ行音は中国語の k-・kʰ-・g-・ŋ-・fi- との間に音韻対応を認めることができるけれども、d-・tʰ-・m-・b- との間にはそれを認めがたい、とすることができる。

(9) p-・b-・m-, および k-・ŋ-・fi- などとハ行音との対応

浜 (pien>pīn, 呉漢ヒン) 「はま」 ↔ 浜 (φama)

嬪 (bien>pīn, 呉ビン, 漢ヒン) 「よめ・ひめ」 ↔ 姫 (φime)

文 (miuən>wén, 呉モン, 漢ブン) 「あや・もじ・ふみ」 ↔ 文 (φumi)

牙 (ngǎg>ya, 呉ゲ, 漢ガ) 「きば」 ↔ 齒 (φa)

脛 (fiŋ>tciŋ, 呉カク, 漢キヤク) 「はぎ」 ↔ 脛 (φagi)

中国語の p-・b-・m- が日本語のハ行音と対応するというのは非常に自然である。また、中国語のいわゆる牙音 (k・g・ŋ など) が日本語のハ行音と対応するというのも、たとえば

インド・ヨーロッパ祖語の k 音がゲルマン祖語において x 音になり、英語において h 音になったことや、たとえば日本語の「よう食べない」の「よう (yō)」が「よく (yoku)」の音便形であることを考えてみれば、容易に納得される。小林は牙音とハ行音の音韻対応について「可能性がある」といくぶん腰を引いた態度をとっているけれども、実際には可能性があるどころか、きわめて多くの語において明確な音韻対応が観察される。もっとも、小林があげている例はほとんどが不適切である。篋 ($k^h \text{āp} > t^h \text{ie}$)「はこ」が「箱 (ϕako)」となり、原 ($\eta \text{ruān} > \text{yuán}$)「はら」が「原 (ϕara)」になった、などという指摘は論外としか言いようがない。

このように小林が示している借用語の例には不適切なものが非常に多く含まれているけれども、大和言葉の中に中国語からの借用語が多数含まれていることは否定できない。このような借用語は、言うまでもなく中国語を話す渡来人がもたらしたものである。中橋孝博 (2005) は、弥生渡来人の人口増加に関するシミュレーションを行い、「少数の渡来人でも短時日で地域住民の多数を占めるに至ることは十分に可能である」(223 頁) ことを指摘している。

しかし、弥生人と縄文人との間で人口比の逆転が起こったとしても、縄文人が使っていた言語が亡んでしまったとは思われない。小林が「日本語はその出発点からして、中国人との交渉の中で形成されてきた」(172 頁) と言うのは極論である。小林は、日本語と中国語との関係をそのように見たうえで、両言語間に音韻対応らしきものを見つけると、それをただちに中国語が日本語に借用された例と見なしている。しかし、両言語間に音韻対応が観察される場合でも、それが借用による結果ではないことも十分にありえる、というのが私の見解である。私見では、中国語の牙音と日本語のハ行音との音韻対応こそ、そういう例の一つである。また、すぐあとで論じるが、牙音とヤ行音・ワ行音との音韻対応も同種の例である。

2.2. 縄文日本語の発掘

大和言葉は弥生時代の借用語ばかりではない。それには縄文時代以来の本来語も多く含まれている。あたりまえだと思われるかもしれないが、このことを論証するのは容易なことではない。というのも、古代中国語とのつながりはないと言い切れる大和言葉は案外と少ないからである。前節において、たとえば中国語の篋 ($k^h \text{āp} > t^h \text{ie}$)「はこ」は日本語の「箱 (ϕako)」になりえないと述べたが、このことは「箱」が借用語でないことを意味するものではない。それは明らかに匚 ($\text{pīaŋ} > \text{fāŋ}$)「はこ」や缶 ($\text{pīoŋ} > \text{fōu}$)「ほとぎ」と同源であり、それゆえ弥生時代にこの語が借用されて生まれたものかもしれない。またたとえば、「やわらか」あるいは「にっこり」を意味する日本語の「和 ($\text{niki} \cdot \text{niko}$)」や「和やか (nikoyaka)」は、中国語の和 ($\text{huar} > \text{zōu}$)「やわらか・やわらげる」と同源ではありえないから正真正銘の本来語であると思われるかもしれないが、次の例はそうでない可能性を示唆している。

柔 (niog > zóu, ㄋㄧㄨˊ, ㄓㄡˊ) 「やわらかい」 ↔ 和 (niki · niko)

和 (fiuar > xǔ · xuò, ㄒㄩˇ, ㄒㄨㄛˋ) 「やわらぎ」 ↔ 柔 (yawara)

このように、同源の語が異なる漢字によって表される例は少なくない。次の例も、漢字を見ただけでは同源の語の組み合わせであるとすぐには判断できない事例である。

跋 (puat > pá, ㄅㄚˊ, ㄆㄚˊ) 「ゆく・ふむ」 ↔ 走る (φasiru · wasiru)

弁 (piən > piàn, ㄅㄣˊ, ㄆㄢˊ) 「かんむり・花びら」 ↔ 花 (φana)

扱 (niəŋ > rǎŋ, ㄋㄧㄥˊ, ㄖㄥˊ) 「すてる・なげる」 ↔ 投ぐ (nagu)

会 (fiuad > xuì, ㄒㄨㄟˋ, ㄑㄨㄞˋ) 「あつまり・あつまる」 ↔ 集む (atumu)

話 (fiuād > xuè, ㄒㄨㄟˋ, ㄑㄨㄟˋ) 「はなす・はなし」 ↔ 語る (kataru)

これらの例に見られる音韻対応が借用によるものであるかどうかは決めがたい。しかし、決められそうな場合もある。それはたとえば、「一対二の音韻対応」が観察される次のような場合である。

歩 (pak > pù, ㄅㄨˋ, ㄆㄨˋ) 「あるく・はかる」 ↔ 歩む (ayumu)
↔ 計る (φakaru)

「歩む」と「計る」を意味する語が中国語において一つであるのは、昔は歩いて距離を計ったからである。このことを確認したうえで、上に示した中国語と日本語との間にどのような音韻対応が存在し、それがいつの時代にまで溯るものであるかを考えてみよう。

まず、古代中国語音 pak と日本語の ayumu の音韻対応は次のように想定できる。ayumu の a- は pak の pa- に対応する。すなわち、もともと pa- であったものが φa- になり、φ- が脱落して a- になったと考えられる。また、-yu は -k に対応する音である。そして -mu は日本語に特有の動詞語尾である。

一方、pak と φakaru に関しては、pa- が φa- に対応し、-k が -ka に対応している。-ru は言うまでもなく動詞語尾である。

さて、このような音韻対応が想定されるとして、この関係が同時に生まれたということはない。言い換えれば、中国語の pak が一方において ayumu のような形で借用され、他方において φakaru のような形で借用されたとは考えられない。弥生時代に借用があったとしても、それは一方の語だけである。それは pak に近い音を有する φakaru の方であると考えるのが自然であろう。したがって、少なくとも ayumu の方は弥生時代の借用語ではなく、それよりも古い時代からあった本来語だということになる。そしてこのことは、古代中国語の k と古代日本語の y との音韻対応が弥生時代に生じたものでないことを裏付ける根拠の一つとなる。そして、次の例もその傍証として役立つ。

卑 (pieg > pēi, ㄅㄟˊ, ㄆㄟˊ) 「ひくい・いやしい」 ↔ 卑し (iyasi)
↔ 低し (φikusi)

驅 (k^hiug > tɕ^häü, ㄑㄩˊ, ㄑㄩˊ) 「かる・かける」 ↔ はやる (φayaru)
↔ 駆く (kaku)

兄 (hruǎŋ > ciōŋ, ㄨㄣˊ クエウ, ㄨㄟ クエイ) 「あに」
 兄 (ye)
 兄 (ani)

行 (fiǎŋ > ciŋ, ㄞㄢˊ アン, ㄣˊ ギャウ) 「ゆく・おこなう」
 行く (yuku)
 行なふ (ökōnaφu)

動 (duŋ > tōŋ, ㄣˊ ツウ, ㄣˊ トウ) 「うごく」
 動む (töyömu)
 動く (ugoku)

「動む (töyömu)」は「どよめく」さまを音の動きとしてとらえた語であり、「響む (töyömu)」とも表記する。そしてこの語は、中国語の声 (thien > ʃɿŋ) 「こえ」という語とも同源である。一方、「動く (ugoku)」という語は語頭子音の t- または t- の派生形である s- が消失するとともに、動詞語尾の -ku が付加された形態である。

「卑し (iyasi)」は、語頭の pi- が φi- を経て i- となるとともに、-ka- ないしは -ga- が -ya- に変化して生まれた語である。語末の -si は形容詞語尾である。一方、「低し (φikusi)」に関しては、φiku- が中国語の pieg に対応していることは明瞭である。

「はやる (φayaru)」に関して言うと、φa- は中国語の k^hru- に対応し、-ya- は中国語の -g に対応している。同様に、「駆く (kaku)」の ka- と -ku はそれぞれ中国語の k^hru- と -g に対応している。

「兄 (ye)」は k- で始まる語頭音節を継承した形であろう。一方、「兄 (ani)」は語頭音の k- を継承した h- が脱落した形であり、中国語を借用したものである可能性が高いように思われる。

「行く (yuku)」に関しては、yu- が中国語の fiǎ- に対応し、-ku が -ŋ に対応している。一方、ökōnaφu の ökö- に関しては、ö- が fiǎ- に対応し、-kö- が -ŋ に対応している。ö- は fiö- に溯り、fiö- は kö- に溯る形であろう。ちなみに、行 (fiǎŋ > ciŋ) 「ゆく・おこなう」という語は脚 (kiak > tciǎo) 「あし」という語と同源であると見なされる。なお、ökōnaφu の -naφu という動詞語尾の成り立ちについては別途論じることにする。

次に、「一対二の音韻対応」を示す別の例をあげる。

冱 (fiag > xù, ㄣˊ ゴ, ㄣˊ コ) 「こおる」
 凍る (koφoru)
 凍る (kogoru)

透 (t^hog > t^hou, ㄣˊ ツ, ㄣˊ トウ) 「すく・すぎとおる」
 透る (toφoru)
 透く (suku)

臭 (hrog > ciù, ㄣˊ ク, ㄣˊ キウ) 「におい・かぐ」
 匂ふ (niφoφu)
 嗅ぐ (kagu)

負 (biuəg > fù, ㄣˊ ブ, ㄣˊ フウ) 「おう・まける」
 負ふ (oφu)
 負く (maku)

仰 (ŋraŋ > yǎŋ, ㄣˊ ガウ, ㄣˊ ギャウ) 「あおぐ」
 仰ぐ (aφugu)
 仰く (noku)

勝 (thiaŋ > sʰŋ, ㄅㄨㄣˊ ショウ) 「かつ・すぐる・たえる」 ↔ 堪ふ (taφu)
 勝る (suguru)

これらの例において、中国語の語末音 -g・-ŋ は一方で -φo や -φu- に対応し、他方で -gu や -ku に対応している。g・ŋ と φ の音韻対応が弥生時代以前の音韻対応を継承したものであることは、上述の k と y との音韻対応の場合と同じである。なお、niφoφu の n- は k- あるいは g- が変じたものであり、aφugu は語頭音の k- あるいは g- が弱化し消失した形態である。また、suku の su- は tu- が変化した音である。そして、-gu・-φu・-ru は付加された動詞語尾である。

次に、「一対二の音韻対応」を示すさらに別の例を示す。

魚 (ŋiaŋ > yú, ㄩ ㄍㄨ ㄩ ㄍㄩ ㄩ ㄍㄩ) 「うお、さかな」 ↔ 魚 (uwo・iwo)
 魚・肴 (na)
 我 (ŋar > wǒ, ㄨㄛ ㄍㄚ) 「われ」 ↔ 我 (wa・ware)
 己 (na)

これらの例は、古代中国語の牙音と古代日本語の w 音との間に音韻対応が認められることを示す例である。「魚 (uwo・iwo)」は中国語の ŋ- に対応する語頭音が弱化したのちに脱落し、中国語の -g に相当する音が -wo に変じた形であると判断される。一方、「我 (wa・ware)」は中国語の ŋ- に対応する語頭音が w- に変じて生まれた形であろう。

なお、「魚・肴 (na)」に対応する中国語として肴 (fǎo > yáo・ciáo) 「食べられるために煮た魚肉」も考えられようが、この語は魚 (ŋiaŋ > yú) 「うお・さかな」と同源と見なしうる。したがって、「魚 (uwo・iwo)」と「魚・肴 (na)」を同源の語と見なすことに問題はない。また、「己 (na)」は中国語の吾 (nā > wú) 「われ」と同源であると言えなくもないが、この語に対応する明確な日本語は「己 (ana・önö・önöre)」である。

さて、古代中国語の k・g・ŋ と古代日本語の φ・y・w との音韻対応はきわめて多数の語において観察される。下に、その多様な例を示してみよう。

(1) k と φ・y・w との対応

極 (giək > tci, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「きわめる」 ↔ 極む (kiφamu)
 殻 (kʰük > kʰ, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「から」 ↔ 貝 (kaφi)
 頬 (kāp > tciá, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「ほお」 ↔ 頬 (φoφo)
 沢 (dǎk > tsý, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「さわ」 ↔ 沢 (saφa)
 食 (diək > sí, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「くう」 ↔ 食ふ (iφu), 飯ひ (iφi)
 石 (dhiak > sí, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「いし」 ↔ 石 (iφa)
 植 (dhiək > tsí, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「うえる」 ↔ 植う (uwu か uu)
 泥 (dzük > tsuó, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「ぬれる」 ↔ 濡つ (söφötu)
 触 (tʰuk > tsʰü, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「さわる」 ↔ 触る (saφaru)
 江 (kúnj > tciāŋ, ㄍㄨ ㄍㄨ ㄍㄨ) 「かわ」 ↔ 江 (ye)

逖 (tʰek > tʰi, 呉チャク, 漢テキ) 「とおぎける・とおい」 ↔ 遠し (toφosi)

(2) g と φ・y・w との対応

- 稗 (buëg > pài, 呉ベ, 漢ハイ) 「ひえ」 ↔ 稗 (φiye)
 倒 (tɔg > tǎo, 呉漢タウ) 「たおれる」 ↔ 倒る (taφoru)
 潮 (diɔg > tɕʰáo, 呉デウ, 漢テウ) 「しお」 ↔ 潮 (siφo)
 祝 (diɔg > tɕʰáo, 呉漢シュク) 「いのる・いわう」 ↔ 祝ふ (iφaφu)
 癒 (diug > yù, 呉漢ユ) 「いえる」 ↔ 癒ゆ (iyu)
 陶 (dog > tʰáo, 呉ダウ, 漢タウ) 「すえ」 ↔ 陶 (suwe)
 棹 (dɔg > tɕʰào, 呉漢タク) 「さお」 ↔ 棹 (sawo)
 皺 (tsiüg > tɕʰòu, 呉漢シュ) 「しわ」 ↔ 皺 (siwa)
 騒 (sog > sāo, 呉漢サウ) 「さわぐ・さわがしい」 ↔ 騒ぐ (sawagu)
 泡 (pʰɔg > pʰào, 呉ベウ, 漢ハウ) 「あわ」 ↔ 泡 (awa)
 咆 (pōg > pʰáo, 呉ベウ, 漢ハウ) 「ほえる」 ↔ 吠ゆ (φoyu)
 覆 (pʰiɔg > fù, 呉フ, 漢フウ) 「おおう」 ↔ 覆ふ (oφoφu)
 舞 (miuag > wú, 呉ム, 漢ブ) 「まう」 ↔ 舞ふ (maφu)
 交 (kɔg > tɕiāo, 呉ケウ, 漢カウ) 「まじわる」 ↔ 交ふ (kaφu)
 皎 (kɔg > tɕiǎo, 呉漢ケウ) 「しろい・きよい」 ↔ 清し (kiyosi)
 忌 (giɔg > tɕi, 呉ゴ, 漢キ) 「いむ・いまわしい」 ↔ ゆゆし (yuyusi)
 巨 (giag > tɕù, 呉ゴ, 漢キョ) 「おおきい」 ↔ 大し (oφosi)
 危 (ŋiueg > wēi, 呉漢グキ) 「あやうい」 ↔ 険し (keφasi)
 茹 (niag > rú, 呉ニョ, 漢ジョ) 「くう」 ↔ 食ふ (kuφu)
 紐 (niog > niu, 呉ニウ, 漢ヂウ) 「ひも・むすぶ」 ↔ 緬ふ (naφu), 結ふ (yuφu)
 悩 (nog > nǎo, 呉ダウ, 漢ナウ) 「なやむ」 ↔ 悩む (nayamu)
 宇 (fiuag > yǔ, 呉漢ウ) 「いえ」 ↔ 家 (iφe)
 械 (fiëg > ciè, 呉ゲ, 漢カイ) 「かせ」 ↔ 械 (iφi)
 有 (fiuag > yǒu, 呉ウ, 漢イウ) 「ある」 ↔ おはす (oφasu)

(3) ŋ と φ・y・w との対応

- 終 (tionŋ > tɕōŋ, 呉シュ, 漢シウ) 「おわる」 ↔ 弊ふ (tuφiφu)
 凍 (tuŋ > tònŋ, 呉ツウ, 漢トウ) 「こおる」 ↔ 冴ゆ (sayu)
 清 (tsʰieŋ > tɕʰiŋ, 呉シャウ, 漢セイ) 「きよい」 ↔ 清 (saya)
 聴 (tʰeŋ > tʰiŋ, 呉チャウ, 漢テイ) 「きく」 ↔ 聞ふ (toφu)
 上 (dhianŋ > sàŋ, 呉ジャウ, 漢シャウ) 「うえ」 ↔ 上 (uφa・uφe)
 恐 (kʰiŋŋ > kʰōŋ, 呉ク, 漢キョウ) 「おそれる」 ↔ 恐し (koφasi)
 江 (kúnŋ > tɕiāŋ, 呉コウ, 漢カウ) 「かわ」 ↔ 川・河 (kaφa)
 桑 (ŋaŋ > sánŋ, 呉漢サウ) 「くわ」 ↔ 桑 (kuφa)

- 芸 (ŋiad > yì, ㄍㄟ, ㄍㄟ) 「わざ」 ↔ 技 (waza)
 響 (hiaŋ > ciǎŋ, ㄎㄧㄤ, ㄎㄧㄤ) 「ひびく・ひびき」 ↔ 声 (köwe)
 栄 (fiuěŋ > rón, ㄟㄩㄥ, ㄟㄩㄥ) 「さかえる」 ↔ 栄ゆ (ɸayyu)
 映 (iǎŋ > yìŋ, ㄟㄩㄥ, ㄟㄩㄥ) 「はえる」 ↔ 映ゆ (ɸayyu)
 萌 (mǎŋ > mǎŋ, ㄇㄧㄤ, ㄇㄧㄤ) 「もえる」 ↔ 萌ゆ (moyu)

このように、古代中国語の $k \cdot g \cdot \eta$ と古代日本語の $\phi \cdot y \cdot w$ との音韻対応は非常に多くの語において認められる。中には次のように、問題の形態が複合語の一部となっていると見なされる場合もある。

- 心 (siəm > cīn, ㄒㄧㄣ, ㄒㄧㄣ) 「こころ」 ↔ 魂 (tamasiɸi)
 中 (tɬioŋ > tɕōŋ, ㄓㄨㄥ, ㄓㄨㄥ) 「なか」 ↔
 祥 (ǰiaŋ > ciǎŋ, ㄒㄧㄤ, ㄒㄧㄤ) 「さいわい」 ↔ 幸 (sakiɸaɸi)
 幸 (fiěŋ > cīŋ, ㄎㄧㄤ, ㄎㄧㄤ) 「さいわい」 ↔
 果 (kuar > kuǒ, ㄍㄨㄛ, ㄍㄨㄛ) 「果実・はたす」 ↔ 生業 (nariɸaɸi)
 業 (ŋǎp > yǎ, ㄍㄨㄛ, ㄍㄨㄛ) 「なりわい」 ↔

ここで、古代中国語の $k \cdot g \cdot \eta$ と古代日本語の $\phi \cdot y \cdot w$ の音韻対応に関して補足しておかねばならないことが三つある。一つは、下に示すように古代日本語の $\phi \cdot y \cdot w$ が古代中国語の n にも対応するということである。

- 顔 (ŋǎn > yán, ㄍㄣ, ㄍㄣ) 「かお」 ↔ 顔 (kaɸo)
 弱 (niǒk > ruò, ㄋㄧㄠ, ㄋㄧㄠ) 「よわい」 ↔ 弱し (yowasi)
 乾 (kan > kān, ㄎㄢ, ㄎㄢ) 「かわく」 ↔ 乾く (kawaku)
 換 (fiuan > xuàn, ㄍㄨㄢ, ㄍㄨㄢ) 「かわる」 ↔ 代る (kaɸaru)
 吮 (diuən > shǔn, ㄕㄩㄣ, ㄕㄩㄣ) 「すう」 ↔ 吸ふ (suɸu)

ここに示された中国語の語末音 $-n$ は $-k \cdot -g \cdot -\eta$ に溯る音であろう。このことは、たとえば語 (ŋag > yǔ) 「かたる」と言 (ŋiǎn > yán) 「いう」との関係や紐 (niog > niǔ) 「ひも・むすぶ」と紉 (nien > zǎn) 「なわ・つなぐ」との関係、あるいは香 (hiaŋ > ciǎŋ) 「かおり・かおる」と薰 (hiuən > cūn) 「かおり・かおる」との関係を見れば容易に理解される。したがって、 $\phi \cdot y \cdot w$ の $k \cdot g \cdot \eta$ との間に認められる関係が n との間にも認められるのは当然のことである。しかし、 n と $\phi \cdot y \cdot w$ との音韻対応は重要な意味を含んでいる。つまり、 $k \cdot g \cdot \eta$ は $\phi \cdot y \cdot w$ に変わりえても、 n は $\phi \cdot y \cdot w$ に変わりそうにないので、 n と $\phi \cdot y \cdot w$ との音韻対応は借用による結果ではないことを示唆している。要するに、 n に対応する $\phi \cdot y \cdot w$ は、 $k \cdot g \cdot \eta$ に対応する $\phi \cdot y \cdot w$ と同様に、弥生語よりも古い日本語における k や g を引き継いだ音なのである。

もう一つの補足は、弥生語よりも古い日本語における k や g が n にもなったということ、したがって古代日本語の n と古代中国語の $k \cdot g \cdot \eta$ との間にも音韻対応が観察されるということである。まず、次の例を見てみよう。

- 国 (kuək>kuó, 呉漢コク)「くに」 ↔ 国 (kuni)
 曲 (kʰɯk>tɕʰü, 呉コク, 漢キョク)「まがる・まげる」 ↔ かねる (kuneru)
 蟹 (fiæg>ciɣ, 呉ゲ, 漢カイ)「かに」 ↔ 蟹 (kani)
 苦 (kʰag>kʰü, 呉ク, 漢コ)「にがい」 ↔ 苦し (nigasi)
 鄙 (piuəŋ>pĩ, 呉漢ヒ)「ひな」 ↔ 鄙 (pina)
 重 (druŋ>tɕʰón, 呉ヂウ, 漢チョウ)「かさねる」 ↔ 畳ぬ (tatanu)
 縄 (diəŋ>tɕʰü, 呉漢シャ)「なわ」 ↔ 綱 (tuna)

これらの例では、古代中国語の k・g・ŋ と古代日本語の n とが対応している。しかしこの音韻対応は、ここにあげた日本語が弥生時代に借用されたことによるものかもしれない。むしろ、その可能性は大にあると言うべきであろう。しかし、そうであると断言することはできない。

一方、次の例においては事情が異なる。

- 鰐 (ŋak>ɣ, 呉漢ガク)「わに」 ↔ 鰐 (wani)
 永 (fiuǎn>yǒn, 呉キヤウ, 漢エイ)「ながい」 ↔ 永し (nagasi)

ここに示した中国語と日本語の組み合わせは同源の語ではあるが、両者の間に借用関係は認められない。

まず鰐 (ŋak>ɣ)「わに」と「鰐 (wani)」について言うと、中国語の ŋ- と w- の対応は上述したように弥生時代よりも古い時代の音韻対応を反映したものであるから、日本語の wani は中国語の ŋak の借用語ではない。

次に永 (fiuǎn>yǒn) と「永し (nagasi)」について言うと、前者における -n と後者における -g- との対応もおそらく借用によってもたらされたものではない。k や g が n に転じることはあっても、n が k や g に転じることは考えられないからである。

さて最後に補足しておかねばならないことは、日本語の多数の語において φ が有声化して b の音に転じ、さらに b の一部が m の音に転じたということ、したがって下に示すように古代日本語の b・m と古代中国語の k・g・ŋ・n との間にも音韻対応が観察されるということである。この事実は、日中両言語間の音韻対応を考察するうえできわめて重要である。

- 寂 (dzök>tɕi, 呉ジャク, 漢セキ)「さびしい」 ↔ 寂ぶ (sabu)
 統 (tʰoŋ>tʰŋ, 呉漢トウ)「すべる・おさめる」 ↔ 統ぶ (subu)
 秃 (tʰuk>tʰü, 呉漢トク)「はげる」 ↔ 秃ぶ (tubu)
 跳 (dǒg>tʰiào, 呉デウ, 漢テウ)「とぶ」 ↔ 飛ぶ (töbu)
 賜 (diæg>tɕʰi, 呉漢シ)「たまわる」 ↔ 賜ぶ (tabu)
 度 (dak>tuò, 呉ダク, 漢タク)「めもり・たび」 ↔ 度 (tabi)
 頭 (dug>tʰóu, 呉ヅ, 漢トウ)「あたま」 ↔ 頭 (tuburi・tumuri)
 止 (tiæg>tɕʰi, 呉漢シ)「とまる・とめる」 ↔ 止む (tömu)
 端 (tuan>tuǎn, 呉漢タン)「はし」 ↔ 端 (tuba・tuma)

賑 (tien>tɕɿn, (呉)漢シン)「にぎあう・とむ」 ↔ 富む (tomu)

摘 (tĕk>tɕāi, (呉)チャク, (漢)タク)「つむ」 ↔ 摘む (tumu)

積 (tsiek>tɕi, (呉)シャク, (漢)セキ)「つむ」 ↔ 積む (tumu)

船 (diuən>tɕʰuán, (呉)ゼン, (漢)セン)「ふね」 ↔ 船 (tumu)

珠 (tiug>tɕū, (呉)ス, (漢)シュ)「たま」 ↔ 珠 (tama)

住 (dug>tɕù, (呉)ヂュウ, (漢)チュウ)「すむ」 ↔ 住む (sumu)

締 (deg>tì, (呉)ダイ, (漢)テイ)「しめる」 ↔ 締む (simu)

澄 (diəŋ>tɕʰɿŋ, (呉)ヂョウ, (漢)チョウ)「すむ」 ↔ 澄む (sumu)

態 (tʰag>tʰai, (呉)(漢)タイ)「すがた・さま」 ↔ 態・様 (sama)

責 (tsĕk>tɕɿ, (呉)シャク, (漢)サク)「せめる」 ↔ 責む (semu)

醒 (seŋ>cĭŋ, (呉)シャウ, (漢)セイ)「さめる」 ↔ 醒む (samu)

できる語が多数存在するということである。そしてもう一つは、縄文語と古代中国語の中に同源の語が多数存在するということ、したがって、両言語が系統的に無縁ではないということである。

2.3. 「さ百合」が「百合」になった

古代中国語と古代日本語の比較を通じて得られた成果はいくつかある。その一つは、これまで擬態語といういわば屑籠の中に放りこまれていた言葉のいくつかが擬態語ではないと知られたことである。『岩波古語辞典』は、たとえば「柔 (yawara)」の yawa-、「動む (tōyōmu)」の tōyō-、「乾く (kawaku)」の kawa-、「くねる (kuneru)」の kune- を擬態語としている。しかし前節で示したとおり、これらのいずれの形態に関しても、それと同源の中国語が存在する。そしてそれらの中国語のいずれも、擬態語とは縁のない語ばかりである。

二つの言語を比べて得られたもう一つの成果は、これまた大ざっぱに接頭辞とか接尾辞、あるいは接頭語とか接尾語という屑籠の中に放りこまれてきた形態のいくつかについてその起源が明らかになったことである。この節では、まさにそのような形態の一つである「さ」を取りあげる。これは、『岩波古語辞典』が「名詞・動詞・形容詞の上に立つ。語義不詳」としている接頭辞であり、「さ百合 (sayuri・sayuru)」、「さ牡鹿 (sawosika)」、「さ走る (sabasiru)」のような形で現れる。

さて、接頭辞「さ」の起源は単純である。それを知るには、「さ」の付く語を古代中国語と照らし合わせてみるだけでよい。それがひとめで理解できる例を下にあげてみよう。

猪 (tiag>tʃū, 呉(漢)チョ)「いのしし」 ↔ さ猪 (sawi)

苴 (tsiag>tcū, 呉(漢)ソ, 漢シヨ)「あさ」 ↔ さ麻 (sawo)

青 (tsʰeŋ>tcʰiŋ, 呉(漢)シャウ, 漢セイ)「あお」 ↔ さ青 (sawo)

夜 (diäg>yŋ, 呉(漢)ヤ)「よる」 ↔ さ夜 (sayo)

ここにあげた古代中国語と日本語の組み合わせはいずれも同源の語であり、「さ」はもともと接頭辞ではなく、語幹の一部であった。このように判断する根拠の一つは、t や d などの音が s の音に変わりやすいということ、したがって日中両言語間に t・d と s との音韻対応が認められることにある。そしてもう一つの根拠は、前節で明らかにしたように、両言語間に k・g・ŋ と φ・y・w との明確な音韻対応が認められるということにある。

これと同じことは、「さ小橋 (sawobasi)」、「さ小舟 (sawobune)」、「さ小峰 (sawowo)」における「さ小 (sawo)」についても言える。この形態は古代中国語との間に次のような対応が観察される。

小 (siog>ciǎo, 呉(漢)セウ)「ちいさい」 ↔ 「さ小 (sawo)」

また、「手綱を引く」を意味する「さ緒引く (sawobiku)」の「さ緒 (sawo)」に関しては、次のような対応が観察される。

緒 (điag > cù, ㄣジヨ, ㄣチヨ) 「いとぐち・お」 ↔ さ緒 (sawo)

のように、「さ」は付け加えられたものではなく、もともと存在していた要素である。したがって、sa- あるいは s- が付かない形はそれが脱落した形であると見なさなければならない。

さ猪 (sawi) → 猪 (wi)
 さ麻 (sawo) → 麻 (wo)
 さ青 (sawo) → 青 (awo)
 さ夜 (sayo) → 夜 (yo・yu)
 さ小 (sawo) → 小 (wo)
 さ緒 (sawo) → 緒 (wo)

ところで、「さ」の付くすべての語をこのように単純なやり方で説明できるわけではない。たとえば「さ牡鹿 (sawosika)」と「さ百合 (sayuri)」という語の成り立ちは、牡 (mog > mǔ) 「おす」や百合 (pǎkfiap > pǎixǎ) 「ゆり」という中国語との関係では説明できない。これらの語に関しては次のような対応を想定しなければならない。

棹 (dǒg > tǎo, ㄣㄣタク) 「さお」 ↔ さ牡 (sawo)
 揺 (điǒg > yáo ㄣㄣエウ) 「ゆれる」 ↔ *さ揺る (*sayuru)

私見では、「さ牡 (sawo)」は「鹿 (sika)」および「鹿 (ka)」と同源である。したがって、「さ牡鹿」は同源の語を二つ重ねた形である。そしていずれの語も鹿の角が棒か棹のように頭上に突き出ていることに着目して作られた言葉であると考えられる。

一方、「さ百合 (sayuri・sayuru)」は古代中国語の đǐǒg に対応する *sayuru という動詞の派生形であると考えられる。なるほど、*sayuru は想定形ではある。しかし、「ゆらゆらする」を意味する「猶預ふ (tayutaφu)」や、「ゆらゆらするさま」を意味する「たゆら (tayura)」という語が古代日本語に存在したので、これにもとづいて *tayuru という動詞を想定し、さらにこの語の ta- が sa- に転じた *sayuru という動詞を想定することはきわめて自然である。そしてこの想定は、次のように「さ」が脱落して新しい形態が生まれたという考えにも抵触しない。

さ牡 (sawo) → 牡 (wo)
 *さ揺る (sayuru) → 揺る (yuru)

さて次に取りあげるのは、「さ」のあとに n の音が続く語である。これは、「さ」のあとに w あるいは y の音が続く上掲の語とは違って、弥生時代に借用された語であるかもしれない。そのような語が古代中国語とどのように対応するかを示してみよう。

丹 (tan > tǎn, ㄣㄣタン) 「に」 ↔ さ丹 (sani)
 頂 (teŋ > tǐŋ, ㄣㄣチャウ, ㄣㄣテイ) 「いただき」 ↔ さ嶺 (sane)
 野 (điag > yǎ, ㄣㄣヤ) 「の」 ↔ さ野 (sano)
 似 (điǎg > sì, ㄣㄣジ, ㄣㄣシン) 「にる」 ↔ さ似 (sanu)

日中両言語間には n と n の音韻対応は言うまでもなく、g と n との音韻対応も認められるので、上にあげた語の組み合わせは同源の語であると断定できる。なお、これらの語の場合にも「さ」は脱落することになったけれども、「さ似」と「さ寝」は「さ」を失った代わりに、動詞語尾の「る」を獲得した。

- さ丹 (sani) → 丹 (ni)
 さ嶺 (sane) → 嶺 (ne)
 さ野 (sano) → 野 (no)
 さ似 (sanu) → 似る (nōru・niru)

ここまでの単純で確実な話に比べると、ここからの話はいくぶん複雑で不確かである。というのも、今から取りあげる語は上で取りあげた語よりも大きな変化を遂げているからである。そして、そのような語の成り立ちを説明するには、より多くの推定をまじえなければならないからである。そのような例として、まず次の 2 組をあげる。

- 寝 (ts^hiəm > tɕ^hin, 呉(漢)シン)「ねる」 ↔ さ寝 (sanu)
 身 (thien > ʃɿn, 呉(漢)シン)「み」 ↔ さ身 (samī)

ここでは古代中国語の m の音が日本語の n の音に対応する一方で、古代中国語の n の音が日本語の m の音に対応している。このようなねじれた関係がなぜ生まれたのだろうか。

中国語が日本語に借用されるとき、語末音の -m が -nu に転じることは十分にありえよう。それゆえ、「さ寝 (sanu)」という動詞は中国語の寝 (ts^hiəm > tɕ^hin)「ねる」を借用したものである可能性が高い。もちろん、そうではない可能性も否定できない。

一方、中国語の語末音 -n が借用語において -mī として現れるということはないように思われる。古代中国語 thien は、日本語に借用されたら sanu のようになったはずである。したがって、「さ身 (samī)」は本来語である可能性が高い。この語はおそらく、前節の最後にふれたような音変化、すなわち *taku > *saɸu > *sabu > *samu > samī という変化をたどって生まれた語であると推定される。

このように「さ寝」と「さ身」には借用語である可能性に関して開きがあるけれども、これらの語がそれぞれに対応する中国語と同源であることは確かであろう。そして、「さ」が古代中国語の t を含む音節に対応するものであることも確かであろう。なお、「さ寝」と「さ身」が「さ」を脱落させる過程は次のようであったと考えられる。

- さ寝 (sanu) → 寝ぬ (inu) → 寝 (nu) → 寝る (neru)
 *さ身 (*samu) $\begin{cases} \rightarrow \text{さ身 (samī)} \rightarrow \text{身 (mī)} \rightarrow \text{身 (mi)} \\ \rightarrow \text{身 (mu)} \end{cases}$

『岩波古語辞典』は上の「寝ぬ (inu)」という語について「イは睡眠、ネは横になる意」としているが、このように分解できる証拠があるわけではない。inu の i- は sanu の sa- が弱化した形であり、inu の -nu は sanu の -nu を引き継いだ形であると見るのがいちばん自然である。

次に、「さ」の付く別の種類の語を対応する古代中国語とともに示す。

- 走 (tsug>tsöu, 興ス, 漢ソウ)「はしる」 ↔ さ走る (sabasiru)
 声 (thien>šɣŋ, 興シャウ, 漢セイ)「こえ・おと」 ↔ さ鳴り (sanari)
 早 (tsog>tsão, 興漢サツ)「はやい」 ↔ さ苗 (sanaŋe)
 植 (dhiək>tsɿ, 興ジキ, 漢ショク)「うえる」 ↔ さ乙女 (sawotome)
 上 (dhiən>ɣən, 興ジャウ, 漢シャウ)「のぼる」 ↔ さ上る (sanoboru)
 躍 (diək>yuɣ, 興漢ヤク)「おどる」 ↔ さ躍る (saödöru)
 庭 (deŋ>ɰiŋ, 興ヂヤウ, 漢テイ)「にわ」 ↔ さ庭 (saniŋa)
 渡 (dag>tù, 興ド, 漢ト)「わたる」 ↔ さ渡る (sawataru)
 残 (dzan>tsʰán, 興ザン, 漢サン)「のこる」 ↔ さ残る (sanököru)
 双 (süŋ>ɣuən, 興ソウ, 漢サウ)「ならぶ」 ↔ さ並ぶ (sanarabu)
 山 (sän>gän, 興セン, 漢サン)「やま」 ↔ さ山田 (sayamada)

これらの例を見てすぐに気づくのは、著しい音の一致である。中国語はいずれも「さ」と同じ s の音、あるいは「さ」に近い t・d などの音で始まっている。そしていずれも、k・g・ŋ・n の音で終わっている。先に示した例においても、寝 (tshiem>teʰin)「ねる」という 1 語を除いてすべてそうである。これは偶然の一致とは考えられない。とすれば、そのわけをどう理解したらよいのだろうか。

まず最初に理解されねばならないのは、「さ」の前身が形態的に大きく二つに分類できるということである。一つは *sawa のような形態、もう一つは *sana のような形態である。両者は同源であり、その祖形は *taka であったと想定される。ただし、*sana は中国語から借用されたものである可能性が大いにある。

次に理解されねばならないのは、語中での要素間の関係によって、*sawa や *sana を三つに分類できることである。一つは修飾語、もう一つは並列語、そしてもう一つは独立語である。「さ」はこれらのいずれかと関係づけられる。

修飾語であったことが明確な形態は、「さ苗 (sanaŋe)」と「さ乙女 (sawotome)」である。sanaŋe は、古代中国語の tsog「はやい」に対応する *sana と naŋe「なえ」との複合形が

*sananaŋe → sanaŋe

という音変化を経た語であると考えられる。一方、「田植えをする女」を意味する sawotome は、古代中国語の dhiək「うえる」に対応する *saŋa または *sawa と wotome が結合した形の縮約形、すなわち

*saŋawotome または *sawawotome → sawotome

という音変化をたどった語であると考えられる。

並列語であった形態は、「さ走る (sabasiru)」などの sa- である。sabasiru は、古代中国語の tsug「はしる」に対応する *saŋa か *sawa といった形態と ŋasiru との複合形が

*saŋaŋasiru または *sawaŋasiru → sabasiru

という変化を経た語であろう。「さ渡る (sawataru)」や「さ躍る (saödöru)」も同様な形成過程をたどったものと推定される。

独立語であったのは、本節のはじめに示した語すべてと、上にあげた「さ鳴り (sanari)」の sana- や「さ残る (sanököru)」の sanö-, そして「さ並ぶ (sanarabu)」の sana- や「さ山田 (sayamada)」の saya- などである。

「ものおと」を意味する sanari は、古代中国語の thien 「こえ・おと」に対応する *sana に動詞語尾の -ru が付加された *sanaru の派生形であろう。そして、「鳴る (naru)」は *sanaru の sa- が脱落した形であるにちがいない。また、「鳴く (naku)」と「鳴す (nasu)」は *sana に動詞語尾の -ku と -su が付された *sanaku と *sanaru の sa- が失われた形であり、「音(ne)」は *sana の sa- が失われた形であると推定される。これらの変化をまとめて示すと次のようになる。

*さ鳴る (*sanaru) $\begin{cases} \nearrow \text{さ鳴り (sanari)} \\ \searrow \text{鳴る (naru)} \end{cases}$
 *さ鳴く (*sanaku) $\longrightarrow \text{鳴く (naku)}$
 *さ鳴す (*sanasu) $\longrightarrow \text{鳴す (nasu)}$
 *さ音 (*sana) $\longrightarrow \text{音 (ne)}$

一方, sanököru は古代中国語の dzan 「のこる」に対応する *sanö に動詞語尾の -köru (「寒がる (samugaru)」などの -garu に相当) が付いた形であり, 「そのまま変わらず・全部・まるで」を意味した「然ながら (sanagara)」という語は sanököru の派生形であろう。そして, sanarabu は古代中国語の dzan 「のこる」に対応する *sana に動詞語尾の -rabu (「逆らふ (sakaraφu)」などの -raφu に相当) が付いた形であろう。また, 「並ぶ (nabu)」と「並む (namu)」という語も, *sana に -bu あるいは -mu という語尾が付いて生まれた語であり, 「並む」から「波 (nami)」という名詞が派生したと考えられる。これらの変化は次のようにまとめられる。

さ残る (sanököru) $\begin{cases} \nearrow \text{然ながら (sanagara)} \\ \searrow \text{残る (nököru)} \end{cases}$
 さ並ぶ (sanarabu) $\longrightarrow \text{並ぶ (narabu)}$
 *さ並ぶ (*sanabu) $\longrightarrow \text{並ぶ (nabu)}$
 *さ並む (*sanamu) $\longrightarrow \text{並む (namu)} \longrightarrow \text{波 (nami)}$

sayamada の成り立ちについては次のように考えることができる。sayamada は, saya- と -ma- と -da に分解される。saya は古代中国語の sǎn に対応するが, この sǎn は古代中国語の斜 (diag>ciy) 「ななめ・さか」と同源であり, また日本語の「坂 (saka)」, 「高 (taka)」, 「岳 (takē)」などとも同源と見なされる。そして, sayama の -ma は場所を表す「間 (ma)」と同源であろう。ところで, sayama は sa- が脱落して「山 (yama)」となったが, 他方で sa- が脱落せずに「仙 (soma)」という形に変形したと推定される。したがって「仙山 (somayama)」という語は, 同源である二つの語を重ねた語であると見なされる。なお, 「島 (sima)」とい

う語も sayama が縮まった形態であると考えられる。これらの変化は次のようにまとめられる。



このような語源の話はさておいて、本節での考察によってわかったことは次の事実である。「さ」はいろいろと異なる語の残滓の形態である。それゆえ、「さ」に共通語義は存在しなかった。「さ」を接頭辞と見るのはまちがっているのである。

この節の最後に、ここまで言及しなかった「さ」の付く三つの語の起源について述べておきたい。すなわち、「さ衣 (sagoromo)」と「さ雲る (sagumoru)」と「さ霧 (sagiri)」という語の成り立ちについてである。

まず sagoromo について言うと、これは前述の「さ麻 (sawo)」と「衣 (koromo)」が結合した形の縮約形、すなわち

$*sawogoromo \rightarrow sagoromo$

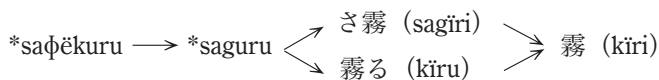
という音変化を経た形であると考えられる。

次に sagumoru について言うと、この語の sa- は中国語の障 (tiaŋ > tɕaŋ) 「さわる・さえぎる」と同源で、「妨害する」を意味する「障ふ (saɸu)」の縮約形であろう。つまり、sagumoru は saɸu と kumoru が結合した形の縮約形、すなわち

$*saɸəkumoru \rightarrow sagumoru$

という変化をたどった語であると推定される。なお、「雲る (kumoru)」という語は「籠む (kömu)」や「籠る (kömöru)」という動詞と同源であり、その原義は「覆う」であつたと考えられる。

sagiri についても同様な説明が可能である。この語は、上述の「障ふ (saɸu)」に、「包む (kurumu)」の kuru- や「衣 (koromo)」の koro- などと同源の $*kuru$ 「覆う」という動詞が付加された形に溯る。すなわち、saɸu と $*kuru$ が結合した $*saɸëkuru$ が $*saɸëguru$ を経て $*saguru$ となり、これが名詞化されて「さ霧 (sagiri)」という語が生まれた。また、 $*saguru$ の sa- が脱落すると同時に語頭の g- が k- に転じることによって「霧る (kïru)」という動詞が生まれたと考えられる。したがって「霧 (kïri)」という名詞は、次のように sagiri の sa- が脱落して生まれた形であるとも言えるし、kïru という動詞の派生形であるとも言えるのである。



このような成り立ちからして、「さ霧」や「霧」という語が中国語の借用語でないことは明白である。しかし、これらの語の祖形の一部として想定される $*kuru$ 「覆う」という語が日本語の「懷 (ɸutokoro)」の -koro と同源であると同時に、中国語の懷 (ɸuar > xuái) 「いどく・

ふところ」とも同源であることを見逃してはならない。日本語と中国語は歴史の深淵においてつながっているのである。なお付言しておく、「さ霧」は「遮る（saegiru）」という動詞と関係がありそうに思われるかもしれないが、この語は「サキ（先）とギリ（切）の音便形サイギリの転。鎌倉時代以後の形」（『岩波古語辞典』）であると言われている。

本節では、古代中国語との比較を通して、これまで接頭辞と見なされてきた「さ」が接頭辞でないことを明らかにした。そして、「さ」に対応する古代中国語の形態が存在することを指摘するとともに、その音韻対応が弥生時代よりも古い時代に溯るものであることを論証しようと努めた。こうして得られた成果もまた、かつてのアジアに一大言語圏が存在したという仮定を裏付ける根拠の一つとなろう。

参考文献

- 池橋 宏（2008）『稲作渡来民——「日本人」成立の謎に迫る』講談社。
- 大野 晋（2000）『日本語の形成』岩波書店。
- 大野 晋ほか編（1974）『岩波古語辞典』岩波書店。
- 海部陽介（2005）『人類がやって来た道』日本放送出版協会。
- 川本崇雄（1978）『南から来た日本語』三省堂。
- 小泉 保（1997）『縄文語の発見』青土社。
- 小林昭美（2006）「日本語と古代中国語」吉田金彦編『日本語の起源を学ぶ人のために』176-85 頁，世界思想社。
- （2007）『『やまとことば』のなかの中国語からの借用語』『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』第九十二輯，151-72 頁。
- 近藤健二（2005）『言語類型の起源と系譜』松柏社。
- 崎谷 満（2008）『DNA でたどる日本人 10 万年の旅——多様なヒト・言語・文化はどこから来たのか？』昭和堂。
- 藤堂明保・加納喜光編（2005）『学研新漢和辞典』学習研究社。
- 中橋孝博（2005）『日本人の起源』講談社。
- 中本正智（1992）『日本語の系譜』青土社。
- 西田龍雄（1978）「チベット・ビルマ語と日本語」『岩波講座日本語 十二・日本語の系統と歴史』岩波書店。
- 野田恵剛（2009）「奈良朝以前の日本語の漢語借用語——小林昭美説の比較言語学的継承のために」『アリーナ 2009』196-202 頁，中部大学人間学研究所。
- パーカー，C. K.（1941）『日本・西藏・緬甸同系論』東亜同文書院支那研究部。
- ミラー，R. A.（1982）『日本語の起源』（村山七郎ほか訳）筑摩書房。
- 村山七郎（1979）『日本語の誕生』筑摩書房。
- 安本美典（1978）『日本語の成立』講談社。

（2010 年 4 月 21 日 受理）